

ラテン語とフランス語

古典作品を素材に [5]

キケロ「法律論」より — 「歴史」(historia)をめぐって —

秋山 学

今月は、キケロの対話篇「法律論」(前51年作)を読んでみましょう。以下は作品冒頭近くの一節で、歴史記述と詩作における執筆方法の相違が話題になっています。

原文 Quintus : Intellego te, frater, alias in historia leges observandas putare, alias in poemate. Marcus : Quippe cum in illa ad veritatem, Quinte, quaeque referantur, in hoc ad delectationem pleraque; quamquam et apud Herodotum patrem historiae et apud Theopompum sunt innumerabiles fabulae. Atticus : Teneo quam optabam occasionem neque omittam. Marcus : Quam tandem, Tite ? Atticus : Postulatur a te iam diu vel flagitatur potius historia. Sic enim putant, te illam tractante effici posse, ut in hoc etiam genere Graeciae nihil cedamus. — *De legibus*, I 5.

仏訳 Quintus : Je vois très bien, mon frère, qu'à ton avis on doit en histoire observer certaines lois, et en poésie des lois différentes. Marcus : Naturellement, puisque dans l'une chaque détail se rapporte à la vérité et dans l'autre la plupart des traits tendent à l'agrément. Encore, y a-t-il et chez Hérodote, le père de l'histoire, et chez Théopompe, une infinité de légendes. Atticus : Voilà une occasion que je désirais; je la tiens et ne la lâcherai pas. Marcus : Quelle occasion, Titus ? Atticus : Il y a longtemps que l'on demande, ou plutôt que l'on réclame de toi une œuvre d'histoire. Car on estime que, si tu te mets à ce genre de travail, nous pourrions arriver même en ce domaine à ne plus du tout nous y trouver inférieurs à la Grèce.

訳 クィントゥス「兄弟よ、わたしはあなたが、歴史記述と詩作に関して、守られねばならない規則が異なると考えているということを理解している」。マルクス「クィントゥスよ、それはつまり、前者にあっては、事柄はすべて真実に関わるのに対し、後者にあっては、ほとんどの事柄が(読者の)歎びに関わるということだ。もっとも歴史の父ヘロドトスにあっては、あるいはテオポンポスにあっては、無数の物語が見出されるが」。アッティクス「望んでいた機会がやってきた。これを逃すまい」。マルクス「それは一体どんな機会だというのか」。アッティクス「あなたに対しては、すでに長らく歴史記述が要請されてきた、あるいはむしろ強要されてきたとも言える。あ

なたが歴史記述を手掛ければ、このジャンルにおいてもわれわれローマ人が、ギリシアにまったく引けを取らないということが実現されると人々が考えているためだ」

この一節は、ギリシアの史家ヘロドトス(前484-425)が、後世「歴史の父」と呼ばれることになる典拠として著名な箇所です。今回は historia という語彙について、少し考えてみましょう。

この語彙は、ギリシア語の ἱστορία という語彙をそのままローマ字に写してラテン語化したものです。もっとも英語で history は「歴史」と訳されるものの、元来ラテン語の historia は「歴史」という意味と「物語」という意味を兼ね備える語彙でした。これをよく留めているのがイタリア語の単語 storia で、「歴史」「物語」双方の意味を表します。英語で「物語」は story であるのと同様、フランス語で historia の意味の広がり、histoire「歴史」と récit「物語」の二語で分担していると言えるでしょう。

さて、手もとのギリシア語大辞典には、元来この ἱστορία というギリシア語語彙が「探究する」という動詞 ἱστορεῖν (historein) の名詞形であり、さらにこの動詞は ἱστωρ (histōr) という名詞・形容詞に由来すると記されています。この名詞 ἱστωρ は、ホメロス『イリアス』(18. 501) の用例では(語頭に氣息を伴わない語形ですが)「法に通じた人」「仲裁者」を意味します。また形容詞として用いられる場合には、一般的に「その事柄によく通じた」(人)という意味を表します。そしてこの語彙の語源としては Fῶτωρ (wīd-tōr) が考えられると記されています。いま F のマークで表した文字は「ディガンマ」と呼ばれ、w【ウ】の音を表す記号です。古代ギリシア語において、このディガンマは文字としては早くに失われたものの、いくつかの語彙の中に、この w 音の痕跡を辿ることが可能であり、たとえば Fοίκος (woikos: 家)、Fάναξ (wanax: 主人) などが挙げられます。

したがって、ἱστωρ という語彙の語頭にもこの w 音を推測できるわけで、その結果この語彙は Fῶδεῖν (wīdein: 知る・見る) という語彙と同根になります。ラテン語では「知る」「見る」という単語は videre であり、この系統の語彙の語頭に w 音を推測できる理由が明らかとなるでしょう(フランス語でこの videre の後裔となる語彙は voir です)。またサンスクリットでは「知る」という動詞の語根は √vid であり、「ヴェーダ」(veda: 知識)はその名詞形、また「十二因縁」の関連で仏教に登場する「明」(目覚め)は vidyā です。さらに、英語におけるこの系統の語彙としては wit (ウィット) や wise (賢明な) が、またドイツ語では wissen (知る) などが挙げられます。

歴史記述は「もののよく見えた」「物知り」の為せる業だ、ということになりましょうか。

(あきやま・まなぶ)